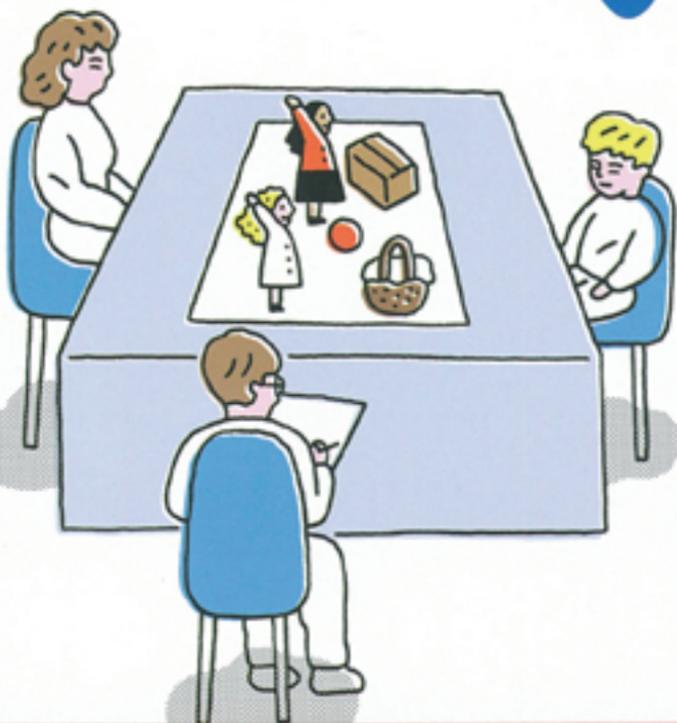


# 「心の理論」テストは 何を測っているのか？

ほんとうは

子どもが  
行動シナリオに  
気づくとき

熊谷高幸



「心の理論」テスト  
にパスできない——  
でも、そのことにも  
積極的な  
意味がある！

「心の理論」テストを、  
子どもはどんな視点で  
捉えているのか？  
集団の中で生活しはじめた  
子どもの「心のあり方」と  
さらなる対人世界の発達の様相を  
詳細に読み解く！

# 「心の理論」テストは 何を測っているのか？

ほんとうは

子どもが行動シナリオに気づくとき

熊谷高幸



新曜社



## 目次

### 序章 「心の理論」 テストの現場に戻る

I

サリーとアン課題とともに有名になった「心の理論」

I

心への気づきをどう確かめるか？

4

テストにパスしない子どもも状況は読んでいる

5

集団の視点と個の視点

7

「心の理論」を専門家の視点から現場の視点へ

8

### 1章 「心の理論」を捉え直す本書の視点

II

「心の理論」の華々しいデビュー

11

「心の理論」はなぜ重要か？

12

「心の理論」に対して現れ始めた疑問

15

「心の理論」を建て直す本書の視点

18

### 2章 「心の理論」 テストを解剖する

23

サリーとアン課題が実施される現場に戻る

23

### 3章

#### 二種類の他者と二種類の「心の理論」

43

- サリーとアン課題がおこなわれる現場の構造は？ 24
- 集団的バイアスのかかる状況 26
- マキシールとチヨコレート課題 29
- 情報共有ができない事態の発生 31
- スマーティ課題 33
- 台本（スクリプト）をもとにして作られる行動イメージ 34
- 映像記憶について 38
- 写真課題 39
- カメラと人の目の違い 41
- サリーとアン課題の中の二種類の人間関係 43
- 二種類の他者と二種類の「心の理論」 45
- 日本の子どもは「心の理論」の達成が遅い？ 46
- 私、あなた関係に重心を置きやすい日本文化 47
- 子ども時代にも及ぶ日本人の人間関係 49
- 同心円的な関係を日欧の言語に当てはめてみると 51
- 私、あなた関係にもとづく日本語世界 53
- 共有と非共有のあいだ 56
- 私、あなたの関係から第三者を見る視点へ 59

## 4章 共同行為の中で気づくスク립トの違い

- 大人がイメージする「心の理論」の誤り 63
- 「同じ」と「違う」に気づくとき 64
- 園での集団生活の始まり 66
- 園生活の台本（スク립ト） 68
- 園生活の中のスク립トの特徴 70
- 集団の中で気づくスク립トの違い 73
- 自閉症児に対するスク립ト支援 75
- スク립トを途中からたどることができる利点 77

## 5章 「心の理論」の新テストの開発

- 共同行為性が見えにくいサリーとアン課題 79
- 新テストの開発 80
- 遠足課題の作成 82
- サリーとアン課題とともに適用してみると 84
- 子どもは自分の選択をどう理由つけたか？ 85
- 現在形と過去形に分かれた理由づけ 86
- クイズ感覚で答える 87
- 時間意識の芽生え 89

二つの過去

91

心を表すことば

92

自分の視点と第三者の視点とのあいだでの迷い

93

所属による理由づけ

94

遠足課題に表れた強い目的意識

96

皆に合流させたい気持ち

98

個の動きへの注目

99

## 6章 子どもが途中経過に注目し始めるとき

103

中継点に注目する必要

103

サリーとアン課題の修正版

104

遠足課題の修正版

106

修正課題を四〜五歳児に当てはめてみると

108

目的意識が強まった場合

110

修正課題でも変わらなかった部分

111

出来事の後先に注目することの重要性

113

遠足課題の修正版にはどう反応したか？

115

## 7章 自閉症児は「心の理論」テストにどう反応したか？

121

強いゴール意識

121

8章 第三者への共感はいつ生まれるのか？ 137

自閉症児はどう理由づけたか？	123
迷いを示さない速い選択	127
迷いはなぜ生じるのか？	128
シナリオによる支えの必要	132
二つを同時に立てることがむずかしい	133
私、あなた関係の基礎の弱さ	134
「心の理論」にともなう共感性	137
動物は第三者の心を意識するだろうか？	138
集団に影響を与える第三者	140
第三者らしい第三者が生まれるとき	141
遅延者・逸脱者としてのサリーの存在	142
遅延者・逸脱者を見る先行者の立場	143
第三者の中に自分を見るようになるとき	146
同情・はるかしさ・秘密が生まれるとき	145
スク립トの発生・衝突・意識化へ	148
集団内で気づくスク립トの同型性	150
「私たち」という視点の意味	151
集団的バイアスと日本の子ども	152
「心の理論」の認知成分と共感成分	154

「心の理論」の達成に男女差はあるのか？  
第三者になると見えてくること 155  
157

## 9章 先行者に対して働く「心の理論」 161

先行者の行動予測が始まるとき 161

カード分類テストの中の「心の理論」 163

カード分類テストを自閉症児に適用してみると 165

集団行動を反映する前頭葉の働き 166

カード分類テストの簡易版を幼児に適用してみる 168

テストの中で示された幼児と自閉症児の反応の違い 170

物語の主人公を追跡する 174

子どもが物語世界に入っていくとき 176

自分の人生の物語を作り始める 177

## 終章 行動の流れの理解が「心の理論」を生む 179

子どもの立場から「心の理論」を捉え直す 179

「私たちの視点」対「彼／彼女の視点」 180

行動を実行前、実行後、途中で見つめられるように 182

スク립トの多様化と集団性バイアスからの解放 184

誤信念課題の一人歩き 187

目次

あとがき	211
和文文献	214
英文文献	217
索引	221
「心の理論」一五か月成立説の登場	188
「心の理論」一五か月成立説への疑問	192
第三者（あなた）の心から第三者（彼／彼女）の心へ	197
「私」「あなた」「彼／彼女」を包み込む「私たち」という場	200
「心の理論」に作用する共感成分と認知成分	202
自閉症児の場合	204
三種類の他者	206

■装幀 白井新太郎  
■装画 朝野ペコ

## 凡例（類似した意味をもつことばの使い分けについて）

この本では、テーマに深くかわるいくつかのことばが文脈に応じて、別のことばで言い換えられている。それらは、ほとんど同じ意味のときとわずかに違うときがあるので、ここで、その使い分けについて少し説明しておく。

第一に、私・あなた・彼／彼女は、一人称（的人物）・二人称（的人物）・三人称（的人物）とも、第一者・第二者・第三者とも表されている。これらは、具体的な場面をイメージしているときと抽象的な関係性を意味しているときで使い分けられているだけで、その意味に違いはない。

第二に、スクリーンということばは、シナリオまたはプログラムと言い換えることが多いが、ほぼ同じ意味である。このうちプログラムは、機械の動作や人間以外の動物の行動も表す、意味の広い概念だが、シナリオは人間の行動を中心とした出来事の進行を表す。一方、スクリーンはもともと台本という意味だが、発達心理学では、よく経験する出来事の流れを子ども自身がイメージしたものをいう。そして、このスクリーンが複合化され、さまざまな場面や人物によって肉づけされたのが物語といえるだろう。

第三に、本文中で、保育園、幼稚園についての記述が多くあるが、近年、増加しつつある認定こども園も、これらと同等のものに見なされるので、それも含め読み取っていただきたい。

## 序章 「心の理論」 テストの現場に戻る



■サリーとアン課題とともに有名になった「心の理論」

「心の理論」(theory of mind) ということばとそれが提起した問題が世に出てからもう四〇年になる。この間、「心の理論」ということばは、心というものに関心をもつ、あらゆる分野の専門家に知られるものとなり、関連する論文が毎年数百発表されるような状況となっている。だが、「心の理論」とは何か、とあらためて聞かれると、その意味を、わかりやすく説明するのはむずかしい。心は、行動のように、その存在を外から直接確認することができない。しかし、それはその人の行動を決定し、外部に影響をもたらすこともある。だから、人々はいつも他の人の心のことを気にかけて、その内容を推測しようとする。簡単にいうと、「心の理論」とは、このような心の働きであると考えられるだろう。

このことばを最初に用いた、動物行動学者のプレマックとウッドドラフは、「心の理論」をもつということは、自分や他の人の中に独立した心の動きというものがあることを前提に、その行動を説明したり予想することができるようになることである、という意味の定義をしている (Premack & Woodruff 1978)。つまり、「心の理論」とは、行動の背後にあって、それを制御する心の存在に気づくことであるように受け取れる。しかし、この定義を見ても「心の理論」はまだイメージしにくい。だが、その一方で、このことばが、これほど広く世界に浸透したのは、「心の理論」の成立を確かめることができるとする、あるテストが現れたからである。

そのテストとは、インターネットで「心の理論」と検索すれば、おびただしい数の図版で表示される、サリーとアン課題 (図 0-1) である (Baron-Cohen et al. 1985)。

テストの内容については、この本の中で何度も触れることになるが、ごく簡単に述べると次のようになる。サリーがビー玉をカゴの中に片づけ、その場を離れているあいだにアンがそれを箱の中に移しかえてしまう。戻ってきたサリーは、ビー玉で遊ぶためにどこを探すか、というテストである。「箱」と答えてしまう者は、ビー玉が移されたことを知らないサリーの心が読めていない、ということになる。

このテストを実際に子どもたちに適用して気づくのは、「心の理論」テストの開発者たちがいうとおり、四歳頃までの子どもや自閉症児の多くは、このテストにパスできないという結果

序章 「心の理論」テストの現場に戻る

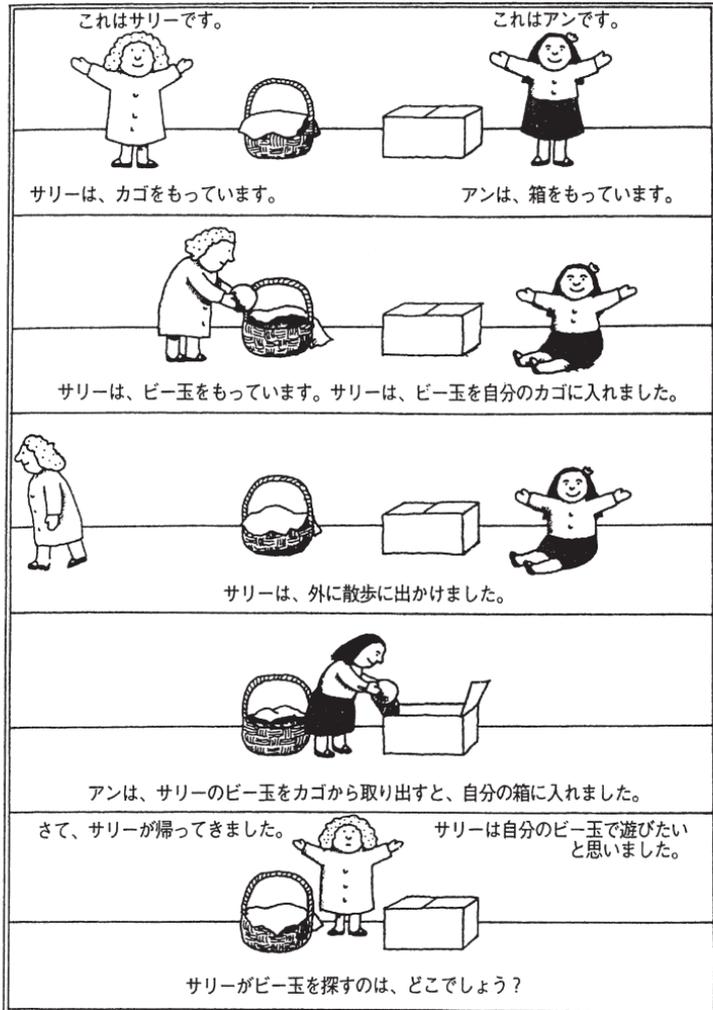


図 0-1 サリーとアン課題 (フリス 2009, p. 162より)

が見事に現れる、ということである。そして、この事実には衝撃を受けた、世界の人々が、このテストや、これに類する種々のテストを年齢や文化や認知特性の異なる多くの子どもたちに適用することになったのである。

■心への気づきをどう確かめるか？

ところで、サリーとアン課題は、なぜ、「心の理論」の成立を証明する、といえるのだろうか？ 人は、行動しながら常に心を働かせている。だから、このようなテストを実施しなくても、心への気づきは示せそうな気がする。しかし、実際には、それはむずかしい。というのは、心の表れに気づくことと、心そのものの存在に気づくこととは別のことだからである。

そこで、この問題について考えるために、サリーとアン課題で、サリーがいらないあいだに、ビー玉の移動はなかったと考えてみることにしよう。そのうえで、テストに参加した子どもに、サリーはビー玉で遊ぶためにどうするか、と聞いてみるとどうなるか？ すると、ほとんどの子どもは、カゴと正しく答えられるだろう。だが、その答えを出せたのは、サリーの心を読んだためとはいえない。ビー玉をカゴにしまい、再びそこを開けて遊ぶ、というのは、すべてが一連の行動の中に組み込まれているので、特に心というものをもち出さなくても答えが出せる。回答者の中には、行動を進めるときのサリーの心を意識して答えている者がいるかもしれない。

しかし、この方法では、それを確かめることができないのである。

物事が順調に進んでいるあいだは、人は心をほとんど意識しない。人が心というものを強く意識するようになるのは、思いと現実がズレているときや人と人の心の内容がズレているときである。たとえば、友だちからすすめられて読んだ本が全く面白くなかったとしたら、面白いと期待していた自分の心や、それを面白いといった友だちの心について考えることになるだろう。哲学者のダニエル・デネットは、誤りの信念（現実に合わせていない思い）にもとづく人の行動を理解し、予想することだけが、「心の理論」の存在を明らかにする、と結論づけた（Dennett 1978）。そして、この結論にもとづいて作られたのが、誤信念課題と呼ばれる多くのテストであり、その代表がサリーとアン課題ということになる。

そして、冒頭で述べたように、このテストは、四歳頃を境にパスする者が急増することを明らかにするとともに、自閉症児の場合は、知的能力が高くても、パスすることが非常にむずかしいことが示されたのである。

■テストにパスしない子どもも状況は読んでいる

だが、このように見事に、できる子とできない子を区別するテストでありながら、実際に適用してみてもさらに気づくのは、テストにパスする子としない子の立ち居振る舞いに決定的な違

いを感じにくい、ということである。課題にパスせず、まんまと、サリーはビー玉を探すために「箱を開ける」と答えてしまう子どもたちの大多数が、きちんとテーブルの前に座り、検査者の話を聞き、受け答えをする。つまり、状況の意味を知り、検査者の意図に答えようとしている。その意味では、相手の心を読もうとしているように見える。

では、なぜ、この子どもたちはテストにパスできないのだろうか？ それは、子どもにとって、対面する検査者の心を読むということ、話の中に出てくるサリーの心を読むということとは別だからである。検査者は、いま直接かわわっている、私ゝあなた関係の中にある人である。しかし、サリーは直接かわわることができない、物語の中の人、つまり彼女（第三者）に相当する人物である。そして、このような、第三者の行動を予測するときに、心という独立したものの存在を考えなければならなくなる、ということを示すのもこの本のひとつの目的である。

サリーとアン課題で、サリーは箱を開けると答えてしまう子どもは、いまビー玉は箱に入っていることを知っている、自分の心と他者の心を混同しているからだ、と多くの人は結論づけるだろう。しかし、それだけでは、この課題の本当の意味は理解できない。自分の心は本当に自分自身が作った心なのか？ それは皆の中で作られ、皆と共有している心なのではないか？ また、他者の心というときの他者とはどのような他者なのか？ それは、あなたなのか、彼／彼女なのか？ このようなところから考えを進めていかないと「心の理論」の意味は理解でき

ないだろう。

「心の理論」テストにパスしないのは、パスしない方向に、この時期の子どもたちの心が仕組まれているからである。この時期までに子どもたちが身につけるのは、私ゝあなた関係の中で行動を深めていくことである。だから、その思考方法をサリゝに当てはめている、と考えられる。つまり、「心の理論」テストにパスできないことにも積極的な意味が含まれている、と考えられるのである。

#### ■ 集団の視点と個の視点

「心の理論」の成立にさしかかる前の、三ゝ四歳というのは、まさに集団への参加を経験し始める年齢である。保育園や幼稚園に入るまでの子どもは、多くの場合、家庭の中で、親による規制はあるが、自分の意思に従い、自分のやり方で行動できる。しかし、入園後は、集団の目的に従い、集団の流れにのって行動する生活が中心になる。つまり、個の意図よりも集団の意図が優先されるようになるのである（三歳未満児の集団保育の場もあるが、そこで身につけることの中心は集団活動ではない）。

この時期の子どもの「心の理論」テストへの反応には、いま述べたような、心や行動のあり方が色濃く反映しているように思われる。テスト場面で、子どもは個の視点でなく、集団の視

点で判断を下している、と考えられるのである。集団の視点とは、後で詳しく見ていくように、皆で望ましいゴールに行き着こうとする視点である。ところが、サリーとアン課題でたずねられているのは、集団でなく、サリーという個の視点なのである。しかし、「サリーとアン」などのテスト結果の表面をなぞるだけでは、そのことに気づきにくい。そこで、このテストがおこなわれる状況を見直すことで、また、集団の意図や行動をもっと反映するテストを作成することによって、「心の理論」テストが本当は何を測っているのか、を明らかにしたい。

#### ■「心の理論」を専門家の視点から現場の視点へ

すでに述べたように、「心の理論」は、いまや発達心理学の中心的なテーマとなり、この四〇年間に膨大な研究データが蓄積されることになった。また、その研究方法も多様になり、専門家でないと立ち入ることができない世界になりつつある。すると、「心の理論」について学ぶということ、すでに成された、それらの研究成果について学ぶということになり、自分自身の新鮮な目でその世界を見つめることがむずかしくなっている。しかし、本当は、子どもの「心の理論」は、世界中のどこにでもいる子どもたちが、どこにでもいる大人たちに見守られながら獲得するものであるはずである。だから、その現場を見つめ直すことで、まだまだ多くの発見ができるはずである。

ところが現状では、「心の理論」は上から目線の発達論になっているように見える。幼児にサリーとアン課題を適用してみてもできないと、「やはりまだ幼いから」と結論する。また、自閉症の子に適用してできないと、「やはり自閉症だから」と結論する。高い基準を作っておいて、そこに到達しているか、いないか、で判断する。そして、届いていない子たちについて、いま、どこにいるのか、についてはあまり言及されていない。だから、子どもたちはそこに置き去りにされているのである。

これに対して、この本は、「心の理論」を、いわば下から目線の発達論に作りかえることを目的にしている。「心の理論」はどのように準備されるのか？ そして、そこにまだ到達していない子は、いまだどこにいて、何を獲得しているのか？

いまでは「心の理論」について多くのテストが開発されているが、その一方で、サリーとアン課題のような標準的な方法を用いたときに、なぜ、四歳頃を境にできるものとできないものに分かれるのか、という基本的な問いにも納得できる答えが出されているとはいえない。そこに、この時期の子どもたちの生活を支配する集団の視点を取り入れて答えを出そうとするのが本書の内容である。

だが、「心の理論」テストにパスできなかった子どもたちも、やがてそれにパスできるよう